

井波純追悼企画「うるしつぐ」

北本 雅久

会津大学短期大学部研究紀要 第 83 号抜刷

2026 年 3 月

井波純追悼企画「うるしつぐ」

北本 雅久*

【要旨】本稿では、2024年4月2日に逝去された会津大学短期大学部井波純教授の功績を、地域内外に広く紹介することを目的に企画・運営された追悼企画「うるしつぐ」における制作活動の概要を報告する。特に、筆者が担当した追悼展に関連する広報ツールのデザイン、展示構成、ならびに追悼集の編集・デザインに焦点を当て、その制作意図と成果について示す。

* 会津大学短期大学部産業情報学科准教授

1 はじめに

本稿は、会津大学短期大学部の井波純教授（以下、井波先生とする）を追悼するために実施された企画「うるしつぐ」に関する制作報告である。企画は、追悼展（2025年2月10日～12日開催）および追悼集（2025年4月2日発行）を中心に構成された。筆者は2024年5月より追悼企画実行委員会の一員として参加し、追悼展の広報ツール制作、展示構成、ならびに追悼集の編集・デザインを担当した。

追悼企画名「うるしつぐ」は、漆芸の修復技法である「金継ぎ」に着想を得て、実行委員会により命名されたものであり、井波先生が漆芸家・教育者として、生涯にわたり技術・産地・人々をつないできた歩みを象徴している。

2 追悼展の広報ツールについて

2025年2月に開催した追悼展『追悼 井波純漆芸展 うるしつぐ』では、広報ツールとしてポスター（図1）、チラシ（図2）、パンフレット（図3）を制作した。

ポスターとチラシは、井波先生の作品を強く印象づける色である「朱」と「黒」の配色を基調としてデザインした。右上部には、高度な塗りの技術によって制作された《漆組器「悠かなる祈り」》（2022年）の作品写真を紙面の約三分の一を占める大きさに配置し、その造形的特徴を強調した。作品とともに配した朱と赤のグラデーションによる色面は、作品に多く用いられた「ぼかし塗」の技法を想起させるとともに、漆の可能性を追求し続けた作家としての情熱を象徴している。

また、轆轤によって生み出された曲線美を引き立てるため、背景には直線的要素や十分な余白を取り入れた。さらに、作品のフォルムや細部の造形性を抽象化した軽やかなパターンと、始筆と終筆に緊張感をもたせた書体で大胆に配置した展覧会名によって、井波先生の制作活動における確固たる信念と、多くの人を惹きつけた人物像を視覚的に表現した。

パンフレットでは、井波先生の「祈り」シリーズを中心に、出展作品12点を掲載した。四つ折りを採用し、開くごとに紙面が広がり、最終的にA3サイズ一面で、朱と黒のみで表現された「祈りの形」を一覧できる構成としている。文字情報は最小限に抑え、作品ごとの表現の差異や、形に込められた思いを視覚的に把握できるよう配慮した。

広報ツールのサイズは以下のとおりである。

ポスター：728×515 mm

チラシ：297×210 mm

パンフレット：（表紙）148×210 mm（展開）297×420 mm

3 追悼展の展示構成について

追悼展『追悼 井波純漆芸展 うるしつぐ』は、会津若松市生涯学習総合センター（會津稽古堂）多目的ホールを会場として、2025年2月10日から12日まで開催された。本展は、実行委員会に加え、卒業生や会津地域および全国の漆芸関係者の協力のもと実施された。筆者は展示構成（図4）および会場内のグラフィックの制作を担当した。

本展では、井波先生の作品と会津大学短期大学部井波ゼミ卒業生の作品、計130点を一堂に展示した。鑑賞順路はあえて設定せず、井波先生の作品と鑑賞者が自由に向き合える会場構成を重視した。そのうえで、井波先生の作品を大きく三つのまとまりとして配置した。一つ目は父・唯志氏のもとで修業していた時期の作品群、二つ目は東京藝術大学大学院修了作品から「祈り」シリーズへと至る作品群、三つ

目は井波ゼミで漆芸を学んだ卒業生たちの作品である。ホールの天井高を活かし、小さな杯から大型作品まで、あらゆる角度から鑑賞できるよう配置することで、空間全体を通して作品の造形的特徴と作風の変遷を理解できる構成になるよう心がけた。

展示会場内のグラフィックでは、入口にポスターと連動したデザインのバナー（図 5）を設置した。その裏面には、学生指導の際に見せていた穏やかな表情の井波先生の写真 9 点で構成したバナー（図 6）を配置し、手前に展示された卒業生の作品とあわせて教育者としての姿を視覚的に表現した。

バナーのサイズは以下のとおりである。

2000×1700 mm

4 追悼集について

2025 年 4 月 2 日に発行した『井波純追悼集 うるしつぐ』の編集・デザインを担当した。追悼集では、輪島および会津の漆器関係者、東京藝術大学関係者、会津大学短期大学部関係者、そして各種プロジェクト関係者の計 85 名に執筆を依頼し、漆芸家・教育者としての井波先生の活動を多面的に記録することを目的とした。

表紙（図 7）には、追悼展のポスターで使用した《漆組器「悠かなる祈り」》と題字を用い、追悼企画全体としての一体感をもたせた。一方で、追悼展のデザインとは異なり、要素と配色を最小限に抑えることで、追悼集としてふさわしい簡潔で厳粛な雰囲気表現した。

また、カラーページとモノクロページを併用することにより、井波先生の作風を象徴する「朱」と「黒」の二色を冊子全体で体感できるように設計した。冒頭のカラーページ（図 8）では、井波先生の作品 18 点と追悼展の会場風景を掲載し、「朱」がもつ鮮やかさと力強さを際立たせた。続く追悼文ページ（図 9）では、あえてモノクロとすることで、文字情報の可読性と「黒」の静謐さ・精神性を強調した。

追悼集の仕様は以下のとおりである。

210×148 mm、194 ページ、無線綴じ

5 おわりに

追悼展の準備期間中は記録的な大雪に見舞われ、少人数での搬入・展示作業は困難を極めた。しかし、三日間という短い会期にもかかわらず、県内外から卒業生をはじめとする多くの来場者を迎えることができた。

追悼展および追悼集の制作は、井波先生の漆芸家および教育者としての功績を広く紹介するとともに、関係者が思い出を共有する場を創出する機会となった。限られた素材や空間条件の中で、一人の漆芸家の作品群と人物像を視覚的に表現する試みは、デザイナーとして貴重な経験となった。今後の制作活動にも大いに活かすことができると考えている。



図1 ポスター



図2 チラシ



図3 パンフレット



図4 追悼展の会場風景



図5 会場入口に設置したバナー



図6 卒業生の作品の前に設置したバナー

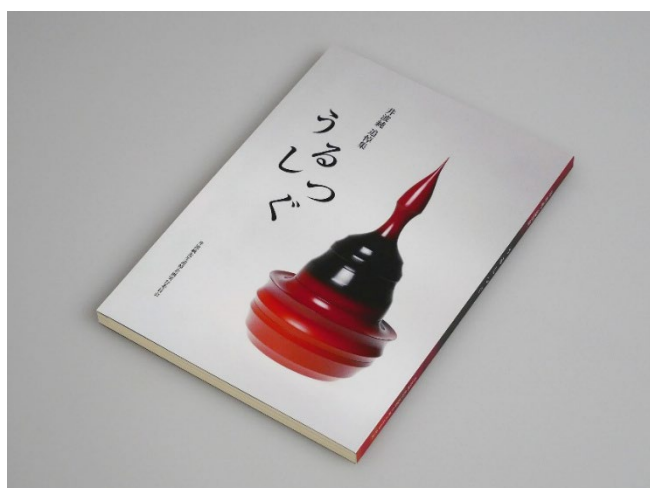


図7 追悼集（表紙）



図8 追悼集（作品図版ページ）



図9 追悼集（追悼文ページ）

